

高等学校 漢文の授業

一史伝（『史記』から「項羽と劉邦」）を読む一

金子 直樹

古文（日本古典）とはまた別の感覚と論理性とによって表されている漢文は、現代日本社会を生きる高校生が多様な思考の軸を獲得するために有効な学習材である。その有効性はもちろん、故事成語やエピソードなどの知識量だけではなく、彼我の論理の違いを意識した上での批評的な読みによって発揮される。「昔の中国には、とんでもない豪傑がいた」という驚きだけでは思考を深めたことにはならない。その「豪傑」のどのような面をどのように評価しているのか、それをどのように表現しているのかということを読み解くことを通して、生徒たちが現有の基準・思考の軸を更新してゆく契機としたい。

1. 「項羽と劉邦」単元構成

この授業報告は、2012年度5年生(高校2年生)での漢文の授業によるものである。

「鴻門之会」や「四面楚歌」が教科書によく取り上げられる「項羽と劉邦」を、歴史家司馬遷の問題意識（「天道是邪非邪」）と「項羽本紀」「高祖本紀」のテキストに即して考えられるように、「伯夷列伝」を導入として、両本紀の「太史公論讚」までを全20講で構成した。

単元構成(教材編成)は以下の通りである。

伯夷列伝などの長いものを除き、各講毎にプリント1枚の教材として、1時間での扱いとした。

各講小見出し後の()内は、教材本文の冒頭と、明治書院『新釈漢文大系』での章数字である。

長時間にわたる単元となるので、生徒に対して最初に全20講の構成と内容のまとめりの学習の目安(*印)を提示した。

第1講：司馬遷の歴史意識（「夫学者載籍極博，猶考信於六芸。」伯夷列伝1～3）

*『史記』筆者司馬遷の歴史家としての態度を捉える。

第2講：項羽の生い立ち、人となり（「項籍者下相人也。」項羽本紀1～3）

第3講：劉邦の生い立ち、人となり（「高祖沛豊邑中陽里人。」高祖本紀1, 2）

*項羽と劉邦それぞれの生い立ちや人となりの表現、特に秦の始皇帝に対する言葉を比較して、両者の人物像をとらえる。

第4講：項羽の戦いの強さ①（「秦二世元年七月，陳涉等起大沢中。」項羽本紀4）

第5講：項羽の戦いの強さ②（「項羽已殺卿子冠軍，威震楚国，名聞諸侯。」項羽本紀17, 20）

第6講：沛公の政治の柔軟さ（「漢元年十月，沛公兵遂先諸侯至霸上。」高祖本紀18）

*項羽と劉邦それぞれの戦い方、特に項羽の武力と劉邦の政治力とを比較して、両者の人物像をとらえる。

第7講：鴻門の会①（「(楚軍)行略定秦地，至函谷関。」項羽本紀21）

第8講：鴻門の会②（「沛公旦日従百余騎，来見項王，至鴻門謝曰」項羽本紀24, 25）

第9講：鴻門の会③（「於是，張良至軍門，見樊噲。」項羽本紀26）

第10講：鴻門の会④（「沛公已出。項王使都尉陳平召沛公。」項羽本紀27）

第11講：鴻門の会⑤（「居数日，項羽引兵西屠咸陽，殺秦降王子嬰，燒秦宮室。」項羽本紀28）

参考：もう一つの鴻門の会（「或説沛公曰，秦富十倍天下，地形疆。」高祖本紀20, 21）

*鴻門の会での項羽と劉邦それぞれの言動、特に危機への対応や部下とのやり取りを比較して、両者の人物像をとらえる。危機を逃れ得た劉邦は、劉邦をとらえなかった項羽は、どのような人物として描かれているのかを具体的に読み取る。また、項羽本紀と高祖本紀との違いを意識する。

第12講：項羽の強さと沛公の運①（「(漢二年)春，漢王部五諸侯兵凡五十六万人，東伐楚。」項羽本紀37, 38）

参考：もう一つの彭城の戦い（「漢王得劫五諸侯兵，遂入彭城。」高祖本紀29, 30）

第13講：項羽の強さと沛公の運②（「漢三年，項王數侵奪漢甬道。」項羽本紀40, 41）

*勝機を逸した項羽と、窮地を脱した劉邦との人間性、両者の人物像をとらえる。

第14講：項王の最期①（「項王軍壁垓下。兵少食尽。」項羽本紀51）

第15講：項王の最期②（「於是項王乃上馬騎。麾下壯士騎従者八百余人。」項羽本紀52, 53）

第16講：項王の最期③（「於是項王乃欲東渡烏江。」項羽

本紀 54)

参考：もう一つの項王の最期（「(漢)五年，高祖与諸侯兵共擊楚軍，与項羽決勝垓下。」高祖本紀 41)

* 四面楚歌，項王最期での項羽の描写・言動を通して，項羽の人物像をとらえる。

第17講：高祖の天下①（「天下大定。高祖都洛陽，諸侯皆臣属。」高祖本紀 43，44）

第18講：高祖の天下②（「高祖還歸，過沛留置酒沛宮。」高祖本紀 53）

第19講：高祖の天下③（「漢五年，既殺項羽，定天下，論功行封／漢十二年秋，黥布反，上自將擊之，數使使問相国何為。」蕭相国世家 5，9）

* 天下を平定した後の劉邦の描写・言動を通して，劉邦の人物像をとらえる。

第20講：太史公論讚（「太史公曰，吾聞之周生」項羽本紀 56，「太史公曰，夏之政忠。忠之敝，小人以野。故股人承之以敬。」高祖本紀 58）

* 『史記』筆者司馬遷の，項羽と劉邦それぞれへの評価とその方法を理解する。

2. 授業の実際—生徒の学習記録から—

指導者にとって、「項羽と劉邦」は非常に扱いやすい教材である。一時代を築く英雄のエピソードを読むだけでも，文句なしに面白いからである。私も長い教員生活で何度も『史記』から「項羽と劉邦」を扱ってきたが，その度に一読者として面白さを感じ，読みが深く，広く，厚くなってきたように思う。

しかし授業は，物語的な興味を刺激するだけでは成立しない。漢文に顕著な対比・対応の表現形式に着目するという読みの手法を習得することや，筆者司馬遷の問題意識に沿って自らの考えを深めてゆくという読みの態度を獲得すること，それらをふまえた上で最終的には「批評的に読む力」をつけるように学習活動を組織してゆかなければならない。人物やエピソード中心の物語的な読みから，構造的，分析的な読みや批評的な読みが層をなして結びつくように仕組まなければならない。そういう点で「項羽と劉邦」は，慎重な扱いを要する教材でもある。

実際の授業がどのように行われたのかの報告として，以下に生徒の学習記録から幾つかを示す。

第1講 生徒学習記録(E組HM)

伯夷と叔齊は「仁」「孝」といった儒教を重んじる人たちで，その「仁」「孝」を大切にあまりに自国を去り，悪を悪で倒すという武王のやり方をも嫌い，首陽山に隠遁し餓死した。孔子は，そんな伯夷叔齊の人生を，

「怨むことのない生涯だった」と言っているが，司馬遷は「明らかに怨み苦しみ死んでいった」と言っている。司馬遷は，聖人孔子の意見に対して疑問を抱いていました。司馬遷は，ただ単に歴史上起きた事実や人物についてのありのままを書くのではなく，それに対して深く考え，自分自身の意見をも盛り込んでいて、『史記』は司馬遷の考え方にも触れることができるので，これから読み進めてゆくのが楽しみだと思いました。世界史の授業で，司馬遷は李陵事件で武帝の怒りに触れて宮刑となり，その屈辱が『史記』というすごい歴史書を書くエネルギーの源となったと教わりました。『史記』は，司馬遷自身の生き方も反映した歴史書だと思います。司馬遷の考え，疑問に触れて，それらについて私自身も，自分のことに置き換えながら，司馬遷の思考回路に乗って考えてみたいなあと思います。

第3講 生徒学習記録(E組SC)

今回は漢の建国者となる劉邦についての文章を読んだ。名門出身の項羽とは対照的に，劉邦の出自は特定できない。これでは釣り合いが取れないため，竜伝説が加わる。この竜は酒場のシーンでも出てきており，司馬遷の張った，劉邦が大物になるという伏線のようなのである。人柄に関して，項羽は野心家の描写をされているが，劉邦には「仁」があり，人を愛する性格で度量が大きかったと書かれている。始皇帝に対する感想も対照的で，項羽は「取って代わってやる」と項羽らしい感想を口にしますが，劉邦は単純に感動している。ここは明確に項羽と劉邦の対比の構図になっているのだろう。司馬遷は明らかに意図して野心家の項羽と，人を集める魅力を持つ劉邦を対比させているが，結局は劉邦の人望が項羽の武勇を上回って勝利する。中国史によくある勝利パターンだが，司馬遷がその原型なのだろうか，と思った。

第5講 生徒学習記録(A組AK)

今日の授業も楚の項羽についてでした。二つのエピソードがありましたが，そのうちの一つでは，漢文では簡潔に述べて省略するのが原則なのに，「無不○○／○○せざるは無し」という同じ表現をわざわざ三度も繰り返して，いかに楚軍が強かったかを表現していました。なので「ここはきっと司馬遷が強調したかったところなんだろうな」と思いました。もう一つのエピソードは，項羽が降伏してきた秦の兵を穴埋めして殺してしまうという話でした。これは，その2で項羽が「万人の敵を学ばん」と言っていたこととつながっている話で，將軍となった項羽は二十万人をも殺してしまいます。大物の項羽だからこそだな，と感じました。

第6講 生徒学習記録(C組UY)

(前略)また，沛公の秦での行動を読んで，沛公という人物は武将としては弱いかもしれないけれど，逆に柔

軟性があって親しみやすく愛敬のある人物だなと感じた。項羽のように、たくましく頼りがいのある大将もいるが、一つの国をまとめるには、沛公のような人物が必要なかもしれないと思う。

第6講 生徒学習記録(A組AK)

(前略)後半では、つらい法律に苦しめられていた秦の人々を救おうとしている沛公の姿が描かれていた。「法律は三箇条だけ」と言っているが、そんなことでいいのだろうか。守るべきルールはあると思う。沛公は農民出身であるために人々に優しく接するといういい面もあるが、一国のリーダーとなりそうな男としては全然だめだと思う。この調子では国は治まらないと思う。

第10講 生徒学習記録(B組UM)

今回は沛公が宴席から出てきた場面からだった。話を読み進めてゆくうちに、どんどん沛公と項王の頼りなさが分かってゆくと同時に、樊噲・張良や范増の頼もしさが伝わってくる。たとえ項王と沛公のどちらが勝ったにしても、決して一人で国を動かしてはいけないと思った。

樊噲は、宴席で殺されそうになってびくびくしっぱなしの沛公の言葉を冷静に判断し、張良は霸王まで逃げ帰る沛公の身代わりとなって項王范増に玉璧を献上した。沛公側の人たちは、まだ沛公を助けようとしており見捨ててはいないけれども、項王側である范増は項王を見放し始めている。范増が項王をガキ呼ばわりするようになったのには驚いたけれども、その気持ちはとても理解できる。家臣たちはみな正確な予言ができて、それぞれ主人の沛公・項王に伝えている。そこで、とりあえず部下の助言通りにする沛公はまだいいけれども、項王は全く何もしない。沛公と項王とは、同じか反対かと言えば、鴻門之会の場面で、しっかりしていないという点では同じだけれども、家臣の力を上手く使えているかどうかという点では全然違う。この違いが、最後には沛公が項王に勝つことにつながるのだと思った。

第11講 生徒学習記録(D組KM)

今日は鴻門之会のラストでした。最後だけあって、今まで読んできた項羽本紀と高祖本紀でバラバラしていた各々の人の描かれ方が一気にまとまり、項羽の「自分の野望のままに動く」性格と、劉邦の「部下の意見を受け入れて物事を決定する」性格との違いがよく分かるように記されています。項羽本紀の鴻門之会の最後では、文の始まりからいきなり項羽が殺戮モードに入っていて、なぜそんなふうに変ってしまったのか分からなかった所も、もう一つの高祖本紀の鴻門之会を併せて読むと、別の視点から同じ出来事を見ることができて、項羽が咸陽を破壊し尽くすのも分かる気がしました。

第12講 生徒学習記録(A組NM)

(前略)漢王率いる五十六万の大軍に攻められた項羽

が、自らたった3万で戦うことを即決し、東から西からと作戦を巡らしてその日のうちに大軍を打ち破ってしまうという圧倒的な強さが描かれていました。しかし、あと一步のところで大風のせいで漢王に逃げられてしまいます。漢王は逃げる途中で息子と娘に出会い一緒に連れて行くのですが、楚軍に追われてピンチなので、結局我が子を車から落としてしまいます。私は、「土壇場でそんなことをするなんて、人として、親としてどうなのか」と漢王に幻滅しました。とはいうものの、漢王はまたまた部下にいましめられ助けられてピンチを脱出します。(中略)私は、どうも項羽がかわいそうに思えて仕方ありません。圧倒的な強さと決断力を持った理想的な王であるのに、そのあまりに単純な性格のため、運と部下の助言だけで生きていようなおっさんにうまく操られてしまっています。逆に、そんな劉邦みたいな人物が、紀信に「請為王誑楚為王」とまで言われ忠誠心を尽くされているのも納得がいきません。

第12講 生徒学習記録(D組TD)

昔はただのおじさんだった劉邦が「漢王」と呼ばれていて、ずいぶん出世したものだなと思った。今日は主に項羽のすごさが描かれている部分を読んだ。高祖本紀では、漢王に都合が悪いからか、「大破漢軍。多殺士卒。」という一文で終わっているところを、項羽本紀では項羽のすごさを見せつけるために長々と書いてある。「殺漢卒十余万人」が二回も繰り返されて、項羽は二十倍近い兵力を相手にして漢王を追い詰めるが、結局は気候変動により漢王を逃がしてしまう。その後再度漢王を追い詰めても、部下の超人的なパワーで逃げ切られてしまう。今まで「項羽と劉邦」の最初からずっと見てきた漢王のラッキーさ、項羽のアンラッキーさが、今回も如実に表されていると思った。

第18講 生徒学習記録(D組TD)

今回の文章を一読すれば、何か以前に出会ったことがあるような、強烈なデジャブに襲われます。「自為歌詞」「慷慨傷懷」「泣数行下」の三つのフレーズは、14講で述べられていた項羽の様子「悲歌愴慨」「自為詩曰」「泣数行下」と同じです。14講で力や気概で描かれていたのは項羽でしたが、今回の大風や雲で描かれているのは劉邦と部下の武将たちです。項羽は自分のことだけしか歌っていなかったのに対して、劉邦は部下たちのことも歌っているのだから、たとえ彼らが報酬につられて劉邦サイドについていたのだとしても、劉邦は彼らに感謝を忘れないので好感度アップです。こういう少しのことも、司馬遷が取材をした周囲の人々の、漢王を持ち上げようという策略なのかなと感じました。

第20講 生徒学習記録(E組SC)

今回扱ったのは、各本紀・列伝の最後につく司馬遷本

人のコメント「太史公論贊」である。項羽への評価、欠点の指摘、一国のシステムの分析など、とても客観的なコメントに、歴史編纂庁長官としての司馬遷の実力と、彼の自信を感じる。また、列伝・世家など個人に焦点を絞った歴史を残した司馬遷だが、そのクローズアップ型の視点とはうって変わって、今回は王朝のあり方の変化というとても大きな視点を見せる。伝説の王朝である夏王朝から、司馬遷にとっての現代である漢王朝までを通して見渡せる広い視野に、彼の非凡さも感じた。歴史の流れとは、その中で生きる私たちにはとてつもなく大きなものだが、それを遠望し分析した司馬遷にはとても驚かされた。彼は、王朝のあり方を循環していると述べているが、この循環から外れた秦や、古から学ばなかった項羽を非難している。以前私が、「歴史を学ぶ必要があるのか？」と訊いた時に、母は「歴史は繰り返すから、歴史から学ばないといけない」と答えたが、司馬遷の主張もこれに近いのだろう。(というよりも母が司馬遷の考え方に近いのだろうと、授業を受けながら考えた。)

本年の「中・高等学校教育実習入門」の一コマとして、2012年6月20日(水)1限の5年C組の授業で、第12講を扱った。以下は、その際の指導略案である。

①教材観

『史記』の面白さは、登場人物の魅力とともに、筆者の語り口の巧みさにある。私たちは、極限状況の中にあつての登場人物の決断と矛盾とに満ちた言動に引きこまれて、歴史を「時代の英雄たちの、血湧き肉躍る物語」として楽しむと同時に、そのように叙述する筆者司馬遷の方法や方向性を認識することによって、歴史を現代によみがえるものとして相対化してとらえることができる。『史記』の学習では、そのような歴史の具体と思想とを学ぶテキストの扱い方を学ばせたい。

また、現在5年生の古文の授業では『大鏡』を扱っており、虚実取り混ぜた「出来事」がどのような語り口によって表されているのかに着目しながら、授業を進めている。これらの読解の経験で、「歴史」という共通項に依存/帰着するのではなく、テキストに向かう姿勢やの読みの構えを作り出すことにつなげてゆきたい。

②本時の目標

- (1)文章の表現や構成上の工夫に注意して、『史記』の方法を正確に読み取る。
- (2)場面や状況を整理して、項羽と劉邦の人物像を正確に理解する。
- (3)漢文の句法や語法を正しく理解して、漢文の表現に慣れる。

③指導過程

(○学習活動／◎指導上の留意点／＊句法語法などの

確認事項)

【導入】

○本時の目標の確認

◎「鴻門之会」の学習を振り返り、項羽の逸機と劉邦の危機脱出を、司馬遷がどのように描いていたのかを確認する。

◎「生徒のまとめレポート」から発表させる。

【展開Ⅰ】(10分)

○前半(漢之二年春、漢王部五諸侯兵～而漢王乃得与数十騎遁去。)の内容理解

(1)範読を聞き、斉読をする。

(2)項羽率いる楚軍の強さを読み取る。

(3)劉邦が危機を脱出した経緯を読み取る。

◎漢文訓読の口調に慣れる。

◎対比対応の表現は、板書で視覚的に整理する。

◎劉邦の油断「日置酒高會」と、項羽の機敏さを、「晨」と「日中」の語の対比などに着目して読み取る。

◎「殺漢卒十余万人」、「多殺漢卒。十余万人…」の数字の繰り返しによる表現効果を読み取る。

◎劉邦の軍勢が「五十六万人」から「数十騎」に討たれたという数字の対比による表現効果を読み取る。

*副詞「即」「乃」の違いを、文脈の中で確認する。

*接続詞「於是」が、段落を構成する働きに注意する。

*受身句法「為楚所擠」

【展開Ⅱ】(25分)

○後半(欲過沛収家室而西～項王常置軍中。)の内容理解

(1)範読を聞き、斉読をする。

(2)劉邦の危機「漢王急」を読み取る。

(3)劉邦が危機を脱出した経緯を読み取る。

◎追い詰められた劉邦の状況と心情を想像する。

◎「推墮孝惠魯元車下。滕公常下収載之。」の場面を具体的に理解し、劉邦と滕公のやりとりを読み取る。

*使役句法「楚亦使人追之沛取漢王家」

*仮定/反語句法「雖急，不可以驅，奈何棄之。」

【まとめ】(35分)

○テキストの構造を把握する。

(1)項羽と劉邦との描き方が、前半後半で共通していることを読み取る。

(2)「高祖本紀」の該当部分を読む。

◎接続詞「於是」が前半・後半で同じ働きで用いられていることから、段落構成と筆者の意図を読み取る。漢王を追い詰めながら(A)、あと一步のところまで逃げられてしまう(B)という状況の逆転が、A於是Bという構文で繰り返されていることを確認する。

◎叙述の整理を通して現れてくる共通点から、司馬遷の意図と方法を読み取る。

【集結】(45分)

○本時のまとめと次時の予告

3. 生徒まとめレポート

第11講(鴻門之会)が終了した時点で、「司馬遷は、項羽と劉邦とをどのように評価し、描いているのか。歴史と人間との関わりを、どのように描いているのか。」という課題で中間レポートを課した。

各時間毎の学習記録では各人の感想などが様々な読みのレベルで記されていたが、テーマを与えたレポートの形式で書かせると、ほとんどの生徒は分析的、批評的な読みを発表した。以下はその中の数編である。(下線は引用者による)

生徒レポート1(D組OM)：今まで読んだ項羽と劉邦の中で、二人は一部分を除いて徹底して対照的に描かれていた。名門の軍人の家に生まれ、幼いときから戦いの手ほどきを受けていた項羽。農民の生まれで両親の名さえ伝わっておらず、中年になるまで遊び暮らしていた劉邦。最初は、王になる器としては項羽の方が有利だと思えるが、話が進み、項羽の厳しく残虐な面と、劉邦の柔軟な思考と人に好かれる気質が描き出されるにつれて、その認識は逆転する。また、二人がある時だけ同じように見えた場面がある。鴻門之会の時のことだ。項羽も劉邦もがらりと印象が変わり、鴻門之会は、実質二人の部下たちの攻防であった。戦いの最中であるから、これにも勝負をつけるとすると、勝ったのは劉邦側だった。使い物にならない劉邦を部下が巧みにフォローし、うまく逃げる。一方、項羽側は、主人と部下の意思疎通ができず、一族の中でもまとまりが無い。項羽は、十分に王となる資質があったにもかかわらず、従来の考え方ややり方から抜けきることができず、運もなかった。劉邦は、生まれつきの強力な運と人柄、柔軟な思考で最終的に王座を勝ち取る。司馬遷は、新しい時代には劉邦の方がふさわしかったという評価のもと、二人の違いを明確にしたのだろう。部下でも民衆でも、上手に使える人間が歴史の上で大活躍することを強調していると思う。

生徒レポート2(B組HR)：司馬遷は、「項羽」と「劉邦」自体は、あまり評価していないと思う。むしろ、彼ら二人の生き方を問題にしているのだと思う。項羽は強い軍を率い、独断で全てを決める。それに対して劉邦は部下たちがいないと何もできないと言わんばかりに話し合いで決める。人は、何かを決断するとき、その「正しさ」を常に問う。「正しさ」の「価値観」を決めているのである。その正しさの価値観はやはり、多くの人の意見を交えることで、より正しくなっていく。その真理を

遂行したのが劉邦であり、劉邦自身が王になるに値する力が無くとも王になれた最大の理由であるのだと思う。司馬遷は「鴻門之会」を項羽側からの方を細かく記述していたが、それは反面教師的な役割を果たしているのではないかと思う。歴史が変わる大きな境目に一つに、この「正しさの価値観の選択」が挙げられるのではないだろうか。「天道」というのは絶対的なものではなく、その場その場によって変化する。その変化は必ず、その場に立ちあった人間の価値観で決まってゆく。よい天道、わるい天道、両者とも存在しうる。

生徒レポート3(B組GK)：司馬遷は、「孔子の言っていることや詩経に書いてあることを鵜呑みにせず、ありのままの歴史を捉えるという視点で『史記』を書いているのだ」と、最初の「伯夷列伝」授業で確認した。しかし、項羽本紀と高祖本紀にでてくる、二つの「鴻門之会」を見る限り、全く別の歴史を見ているのかと思うほど異なっている。また、それぞれの本紀の中では、二人の性格や、人との関わり方を全く対照的に描いている。読者からしてみれば、二人がどのような人だったのか、想像はしやすいものの、あまりにも意図的に書き分けているような印象を受ける。このような書き方で、司馬遷のめざしていた「ありのままの歴史」の記述は達成できているのだろうか、疑問に思う。また、そもそも歴史を語る時には、主観が交じってしまうもので、100%事実のみを忠実に残すこと自体、不可能なのだと思う。私たちは結果的に劉邦が成功するのを知っているから、彼が部下とのやりとりの中で行動を起こすのを見て、「さすがだ」と思い、司馬遷も結果を知っているから、劉邦には昔から天下を取るような素質があったことを記述しているのだと思う。歴史を読む側も語る側も、どうやっても「ありのまま」にはできないのだと思った。

レポートは、各クラス毎に数編ずつをプリントにして発表させた。上記レポート2と3とは同じB組でのものであるが、レポート2のHRさんが歴史を内在的主観的なものとして考えようとしているのに対して、レポート3のGKさんは歴史を客観的(であるはず)な外部のものとして捉えている。この二人の発表を聞いたB組の生徒たちに「君たちはどちらに賛成するか？」と尋ねたところ、支持は半々であった。

この「論争」は、第2ラウンドに発展をした。「項羽と劉邦」後半の第15講「項王最期」で、歴史内在派のHRさんが学習記録の当番となり、項王最期の場面をふまえてGKさんに「反論」をするという展開となった。以下は、その学習記録である。

第15講 生徒学習記録

すぐに大いに怒ったりすぐに欺かれてしまう、今まで

の間抜けな項羽とはがらりと違う項羽が出てきました。漢軍に追い詰められて楚の歌が聞こえてきた時は、今までだったら「大いに怒る」のに、今回は「大いに驚き」、さらには「自分の力は凄いの運が悪いばかりにこんな事になってしまった」と嘆いてさえいます。また、今回は、「自分の力が弱いのではなく、ただ天が私を嫌っているだけだ」と部下たちに自分の強さを示してもいます。このようなセンチメンタルな項羽や、最後までちゃんと強い項羽は初めてです。司馬遷はどうしてこんな項羽を描いたのでしょうか？ここで私が気になったのは、項羽が自分と「天」との関係について発言していることです。「天道」は、司馬遷が『史記』を書いた根幹にあるキーワードなので、ここに司馬遷の言いたいことが隠されているのではないかと思います。私は、怒らずに驚く項羽も、最後まで強い項羽も、自分の「誰よりも強いのに運のない人生」を、悔しいけれども受け入れているように感じます。司馬遷の一生も、理不尽な人生であったようなので、もしかしたら司馬遷は項羽と自分とを重ね合わせて、項羽と一緒に自分の人生を納得させようとしたのかもしれない。また、もしそうだとすると、中間レポートでのGさんの「ありのままの歴史なのか？」という疑問に対しては、項羽の実際の歴史の大枠を借りて、司馬遷の考える歴史を語るという点で、やはり「ありのままの歴史」と言えるのかもしれない。

GKさん自身、今までは歴史というものを自分からは離れたものと感じていたところに、『史記』の学習を通して「歴史」（あるいは「歴史記述」）の意味について揺さぶりをかけられた、その違和感をレポートで表現していただけない、この「論争」は「対立」というようなものではないのだが、この一連のやりとりによって、生徒の『史記』を読む構えは確実に深まることとなった。

別のクラスの学習記録の一節には以下のようなものもあった。

第15講 生徒学習記録（E組TS）

（前略）この『史記』の読者たちは、司馬遷に翻弄される運命にある。それは、この学習記録をさかのぼってみれば分かる。司馬遷が肩入れをした方に好印象を持ってしまふのだ。歴史は、それを書く者によって伝えられている。このようなことを考えると、本当の強さは武力ではないなと思った。

4. 「項王最期」の「項王笑曰」について

生徒どうしの意見の交換で読みが深まった例は、他にもある。16講「項王最期」で、「願大王急渡。今独臣有船。漢軍至無以渡。」と言う烏江亭長に対して、項羽が、

「項王笑曰、天之亡我、我何渡為。」と答える「笑」の意味についてである。授業の最後の5分で100字程度にこの「笑い」の意味を書かせて、次時に全員のもを一枚のプリントにまとめて配布し、それぞれ発表をさせた。そのプリントでは、例えばC組のものでは全40人中の30人近くが、

10 亭長の「亦足王也」という言葉を聞いて、項羽は、自分が王であることを改めて認識し、その責任を果たせなかったことで、もう自分には王の資格はない、という自嘲を込めた笑いだったのではないかと思う。

20 項王は中国を支配した自分が、江東という小さな地方の王になってくれと言われ、自分も落ちるところまで落ちたなど、プライドが傷つけられ、惨めな自分を笑ったのだと思う。

という「自嘲自虐」の気持ちの込められた湿った笑いであるとしており、

2 項王の死ぬ覚悟を決めて、自分の最期を相手に背中を向けて、逃げ腰で迎えるより、堂々と相手に向き合って迎えようという意志の表れだと思う。

8 今までは天下をとるために必死だったが、天命により天下をとれなくなったので、ふっきて、一人の武将として生きようと思ったから笑ったのだと思う。

18 周囲は敵ばかりで逃げる一方になった項王は、味方する者に会って、おめおめと生き残れないと考え、最期を悟りながら志の強さを取り戻した。

24 司馬遷は最期まで項羽を無敵のままにするため、天からの命令に従うという余裕（死は怖くない）と、自分は一番強いんだという誇りの意味を込めた。

26 武士らしく死を恐れずに受け入れた、余裕の笑いだと思った。一瞬は逃げることを考えたが、「どうせ死ぬのだ」と開き直って戦いに挑んだのではないかと思う。

という「誇り」のこもった快い笑いであるとした者は、上記の5人だけであった（下線は引用者）。

全員に自分の書いたものを発表（音読）させた後、一人3票で「なるほど」「納得」と思うものに投票をした結果は、上記5人のものが120票中の40票以上を占めるまでになった。

「項王最期」での項羽に対する司馬遷の描写は、項羽本紀太史公論讚の「位雖不終、近古以来未嘗有也。」という評価とも結びつくものである。漢と覇権を争った項羽は、もちろん「豈不謬哉」とされるのではあるが、司馬遷の記述は項羽を一方向的に敗者と決めつける単純なものではない。『史記』には、このような多様多面的な読みを試みる余地がある。